



G-POWER X5M TYPHOON

Equipment

G-power ワイドボディキット 280万4000円
 G-power シルバーストーンダイヤモンドフォード
 (23×11.0J) (23×12.0J)



大型ダクトを多数配した直力のフロントフェイス。カーボン製エンジンフードはコンプレックスには含まれないが固定となり、内装には加えながら専用の足スポーティングが配され、またルーフの内張りもカーボンファイバーでトリムとなるのがコワイ。

SUVに6200cc、その事実を余すことなく表現したスタイリングキット。言ってみれば、異端の類に入るモンスタースター。それがトレンド発達の地である東京の渋谷に潜む。早朝、街に喧嘩が騒げる前のあの瞬間、マッチョな肉体が静寂を切り裂き突進する。なんとも興味深い光景だ。そこには奇抜なやっかいな、ミスマッチの美学などが交錯する。これこそリアリティあるストリートシーンの醍醐味だ。

BMW X5M、M、も2代目X5から、いよいよハイパーSUVの製作に乗り出した。今やSUVは、ただの「ヨコモノ」ではない。ユーティリティに優れ、スタイリッシュ、セクシー、クワイエットな走り、現代SUVの新基準なのだ。活気がある、軽快なストリートに適合するのは、間違いのないワケである。しかしこのX5Mは、本来の凄みある魅力も、より一層パンチある姿にドーピングしたのが最大の見所。この迫力を目的にする、もはや有無を言わせないほどの説得力で、誰しもがねじ伏せられてしまいたいところである。

正体はG-Power X5Mタイプーン。フロントバンパー両サイドには斜めにつり上がった大型インテークダクトが目を引き、エンジンフードには、アウトレットダクトが取り付けられている。ホイールアーチ部には鍛えられた肉体を思わせるフェンダーが張り出す。収まるのは23インチにまで達した鍛造ホイールで、低く身構えたフォルムの足下に相応しい存在感を主張する。そして、テールから後方を狙う2本の巨大いセンターマフラー。これらのディテールはフェイクではない。X5Mタイプーンが有する6200ccを余すことなく受け止めるための必要な機能なのである。パワーアップのメインソースとなっているのは、DME (ECU) チ



ストックでは左右3本ずつの4本となるエキゾーストだが、タイプーンではセンター出しデュアルエキゾーストを採用。テールパイプはチタニウム製にペイントしている。

ューニングだ。そしてもうひとつの要因が、実はボディキットにある。タイプーンの前ではバンパーやカーボンフードは大型のインテークとアウトレットダクト化により、冷却性能がノーマル比で15%向上するのだ。逆に捉えると、タイプーンボディキットが前後にあるからといって、6200ccが燃焼できなかったりもする。奥底に潜むX5Mのポテンシャルも、エンジンマネージメントとエレクトロニクスで完全に引き出したモンスタースUV。最高速は推定で300km/hに達する。

意外性とインパクト。不釣り合いのようだが、それがやがてひとつのムーブメントとなる。まさしく渋谷というストリートと、このクルマの放つニオイがどこか共通する。都会派SUVならではの、クルマ一辺倒でないアクティブなライフスタイルを予感させる世界。それでいて、超ハイパフォーマンスカーならではのエンターテインメント性。繰り返しになるが、表面とだけではない強靱なスペックを以ってしてなのである。

考えてみると、憧れたいほどのマルチプレイヤーではないか。秘めたる本性を露にしたのは街の賑わいが消え去った後の早朝。滾んだ空気が橙色を染めた太陽。鳥のさえずりが響く。やがて強靱なサウンドとともにその台風は、勢いよく地を這いながら彼方まで突き抜けたのだ。

公道の覇者。

まさに台風というべき攻撃的なボディワークを採用したモンスタースUVモデル。G-Power X5Mタイプーン。その圧倒的なアビアランスに目を奪われるが、それは決して見せかけだけのファッションではない。全ては走りのため。そんな信念がこの一台に買かれている。

PHOTO: 本村和晴 (Akashiro Kinara)

PHOTO: 本村 弘 (Woods Kinara)

